留日美術学生

――近百年来中国絵画史研究　五――

鶴田武良

はじめに
一、高剣父
二、張大千
三、傅抱石
四、王式廓
資料、留日美術学生名単

はじめに

中華民国（一九一二―一九四九）以降の中国近代及び現代の油画教育と油画の発展に日本の美術学校、わけても東京美術学校（現、東京芸術大学）西洋画科に学んだ中国人留学生が大きな役割を果たしたことは早くから知られている。

しかし、自ら日本留学と称し、あるいは中国刊行の人名録などに日本の美術学校卒業と記されている画家の中に、留学の実態が皆目分らないものがある。例えば、一九〇二年（光緒二八年）東京弘文学院に学び、一九〇九年（宣統元年）に帰国した陳衡恪（字師曾、一八七六―一九二三）は、その父陳三立（号散原）の「長男衡恪状」[1]に「既冠、余の父母皆棄養す、乃ち日本留学に走き、師範高等校を卒業す」とあることに恐らくは拠って、中国では東京高等師範学校卒業と伝えられていて、「陳君師曾墓志銘」[2]にも「師範を日本に学び、高等校を卒業す」と記されているが、同校の卒業生名簿に陳衡恪の名はない。同じように、東京高等師範学校図画手工科卒業といわれる兪寄凡（一八九二―?）、ただ東京高等師範卒業という李石岑（一八九〇―一九三二）の名も同校の卒業生名簿である『茗溪会員名簿』に見られない。兪寄凡については、東京美術専科学校卒業とするものもあるが、その名称の美術学校は東京に存在せず、本当に日本で美術を学んだか否かさえ確かめることができない。

また、『専科以上学校美術教員名冊』[3]は、劉獅（一八九九生れ、一九三六年任上海美術専科学校西画教授）、宋歩雲（一九一〇年生れ、一九四七年時国立芸術専科学校副教授）、袁梅（一九一二年生れ、一九四二年時国立芸術専科学校講師）の四人について、日本大学芸術科卒業としているが、同科の卒業生名簿に四人の名は上がっていない。

日本留学の実状がこのように模湖としていて、留学の事実の確認すら困難である理由のひとつは、正式に入学しても中途退学をしたり、あるいは除籍

処分を受けた場合、その姓名は卒業名簿や同窓会員名簿に上げられないし、入学の事実を確認しようとしても、入学願書や学籍簿などの関係書類は部外者の閲覧が許されないことにある。また、少なからぬ中国人美術学生が学んだ太平洋美術学校、川端画学校のように、戦災によって学籍関係書類を焼失し、在籍を確かめる方法がないところもある。

本稿では、日本留学の状況について疑問のある高剣父と張大千、日本留学がその画風形成に大きな影響を持った傅抱石、日本で習得した素描と学画法を新中国の油画教育の確立と発展に役立たせた王式廓について、留学を中心に述べたい。なお、それぞれの閲歴、画業の全容については、傅抱石を除く三人についてはかつてかなり詳しく述べたので、本稿では繰り返さない。

一、高剣父

高剣父（一八七九―一九五一）の経歴については、青年時代の高剣父に広州述善小学校で教えを受け、のちに高剣父作品の最大の蒐蔵家となった簡又文の「高剣父画師苦学成名記」[4]（以下、成名記と簡称）及び「革命画家高剣父―概論及び年表」[5]（以下、年表と簡称）が詳しく、とくに日本留学に関しては、広州美術学院李偉銘氏の「高剣父〝留学〟日本考」[6]（以下、留学考と簡称）が、これまで知られていない新たな資料に拠って、留学時期や東京での学画状況を明らかにしている。

高剣父の日本留学については『良友』第一四期（一九二七年四月刊）に引く広州『国民新聞』所載「高剣父小伝」に

―略―毅然として革命芸術を以て自任す、乃ち西洋画を法（仏）人麦拉（マイラー）の門に習い、継いで東渡留学し、西洋画及び彫塑を東京白馬会、太平洋画会に習い、東京美術院に于いて美学を研究す―略―

▶挿図1　高剣父　上野公園写生　『高剣父写生稿本集粋』から

▼挿図2　高剣父　越ヶ谷古梅園雲龍梅　『高剣父写生稿本集粋』から

とあるのが最も早く、それより約一〇年後の簡又文の「成名記」には、白馬会、太平洋画会、水彩研究会に学んで帰国、二年後再び日本に行き、日本芸術の最高学府東京美術院に合格、入学した。中国からの最初の合格入学者であった、という。さらに三六年後の一九七二年に発表された、やはり簡又文の「年表」では一九〇六年（光緒三二年）に二八歳で日本に留学、翌年一度広州に帰ったが、すぐに東京に戻り、日本芸術学府東京美術院に合格、入学したという。

李偉銘「留学考」は、高剣父の閲歴に関する文章は、それが誰の署名であっても、高剣父自身が著わしたものか、あるいは高剣父が直接、資料を提供したものであると述べ、彼の日本留学は、高剣父が自ら伝えたものであるという。そして、広州美術館所蔵高剣父「紀念周演辞」及び「高氏手稿」に見える、日本留学についての次のような記述を紹介している。

私は子供のころ日本に留学し、東京白馬会に入り西画を研究した。こ

れは東京美術学校の予科で二年で卒業する。入学後三学期間は毎日石膏頭像を学び、半身像に進む。第四学期に至って、始めて人体を画く。教授一人から三人、毎週の授業は一時間、学生は三〇人。教授は来ても、いつもの通り一人ひとりすっと見てゆくだけで、十人中九人までは改削しない。ただあまりにもひどくちがっている部分には木炭で輪郭を数筆直してそれでおしまいである。第二学期になって、始めて教授に会う。国立美術学校は一、二カ月経っても教授の授業はなかった。

日本の美術学校では、一、二学期の授業は写生と運筆である。写生は多くは動物、花果を写くが、その外器物、茶具、灼具から極端な例では縄まで、写かないものはない。私が太平洋画会に入ったとき、三本の縄を渡された。私は三本の縄が同じにならないよう、ごちゃ混ぜにして写いた。鉛筆画はどのようにしたか。先生から八寸位の大きさの小さな本を渡された。どのページにも数茎の花があり、一週に一ページ臨写した。―略―

ところで、高剣父の日本留学の時期について、先に触れたように、簡又文「年表」は一九〇六年一二月、二八歳のこととし、筆者もかつてそれを踏襲したが、[7] 李偉銘「留学考」は、「年表」に「東京で旅館に投宿した翌朝、門を出たところで、旧友廖仲愷にちょうどうまく出会った。廖は日本に着いてまだ一〇日も経っていないときであった」とあることと、その前後の香港での高剣父と陳樹人との交遊、日本での写生画稿の款識の書体と帰国後の書体との比較などから、高剣父の最初の日本到着は一九〇三年一月二八日（光緒二八年一二月三〇日）、そして遅くとも一九〇四年春に帰広、第二回の東京留学は一九〇五年一〇月以後、恐らく同年末、そして一九〇七年春には広州に戻っていたから帰広は多分一九〇六年冬（一〇、一一月）と推定している。妥当な推論といえよう。

高剣父の東京留学を、右のように

第一回　一九〇三年一月二八日―一九〇四年春

第二回　一九〇五年一〇月又は一一月―一九〇六年冬

とすると、初回の留学当時、東京に存在した美術学校は、女子美術学校（現・女子美術大学）を別にすると、一八八九年（明治二二年）開校の東京美術学校だけであるが、同校に入学した痕跡は全くない。東京美術学校の外に、当時、西洋画法を教えていた機関は、一八九九年（明治三二年）に設置された白馬会附属研究所であるが、先に引いた「留学考」に紹介する高剣父の文章以外に、そこでの留学を確かめる術はない。また、太平洋画会が絵画、彫刻の教授を目的とする研究所を附設したのは一九〇四年であるから、高剣父がそこに入ったということはほとんどありえない。

▼挿図3　高剣父　火焼阿房宮　『嶺南三高畫藝』から

◀挿図4　木村武山　阿房劫火　一九〇七年作　茨城県立美術館蔵　『小学館原色現代日本の美術2』から

第二回留学の時には、太平洋画会研究所はすでに開設されていたが、白馬会附属研究所と同様、そこでの在籍を証する資料はない。

このように東京留学の実状は霧に包まれているが、東京での習画の跡を留めた写生帖が遺されている。近年、高氏遺族から広州美術館に寄贈された大部な資料の中の、第二回留学時に使われたとされている一冊の写生帖（一一×一八センチ）[8]で、挿図一・二に見るような書込みがある。李偉銘「留学考」は、同写生帖から、その他に、虎ノ門、向島百花園、日暮里神社前、帝室博物館、帝国図書館などの書込みを挙げて、第二回留学時の高剣父の活動の拠点が下谷にあったと推測している。

第二回留学以後の高剣父と日本との関わりはまだ調べをつくしていないが、一九〇六年冬の帰広後の作品に、日本画をもとにした作品がいくつかある。その代表的な例は、高剣父の比較的早い時期の作とされる「火焼阿房宮」（挿図三）である。この図は一九〇七年（明治四〇年）の　第一回文展に出品された木村武山筆「阿房劫火」（挿図四）に倣った作品である。木村武山は一九〇六年一一月に日本美術院日本画部が東京谷中から茨城県五浦に移ってから、本図を制作しているから、高剣父が第二回留学中に画稿の過程にせよ本図を見たということはありえないであろう。なお、「留学考」によると、高剣父には同じ主題の作品が、他に少なくとも二点、計三点あるという。

さらに、高剣父の「乗駱駝」（一九二一年作）の断崖の形状と筆法は山元春挙の「寒村雪暮」（一九〇七年作）の崖のそれに極めて近い。

また、高剣父の後期、一九三〇年以後の作品、例えば「南印度古刹」（一九三三年作）や「緬甸仏蹟」（一九三四年作）などの画風が、竹内栖鳳のヨーロッパから帰国後の作品、「羅馬古城真景」（一九〇三年作）や「ベニスの月」（一九〇四年作）などの一連の作品に近いことから、栖鳳の高剣父への影響が論じられているが、筆者は、二人は別々に西洋画に接近して、たまたま同じところに到達したものと考える。この問題については、別稿に譲りたい。

二、張大千

張大千（一八九九―一九八三）も、日本留学の実態が全く分からない画家である。その問題については、かつて発表したことがあるが[9]、この機会に重ねて記しておきたい。

張大千の日本留学は、その晩年に近い一九七一年に刊行された林建同・林紀愷編『當代中国画人名録』[10]に始めて見える。則ち同書「張大千」の條に

―略―一八歳、日本京都に赴き、染織を習うこと四年、二一歳、上海に返る―略―

とあるのを最初に、一九七二年、サン・フランシスコ市デ・ヤング美術館で開催された「張大千四十年回顧展」に寄せた序文でも、張大千は「年一七、峡を出て海を渡り、染織を日本西京（京都）に学ぶ、絵事遂に輟む」と述べている。また、現在では一般に最も信頼できると考えられている『張大千九十紀念展書画集』[11]所収「張大千先生年譜」によると、張大千の京都留学は一九一七年（大正六年）一九歳から、一九一九年（大正八年）二一歳までの三年間である。

京都留学時の年齢については、右のように一七歳、一八歳あるいは一九歳と僅かなひらきはあるが、一九八二年ごろから急に多くなった張大千に関する論文や伝記、年譜は、いずれも京都留学を事実として伝えている。

しかし、筆者の知る限りでは、張大千を紹介した最初の文章と見られる陸丹林の「画人張善子大千兄弟」[12]には、二人の京都留学について言及するとこ

ろがない。やはり張大千に関する基本文献のひとつと考えてよい巣章甫「張大千五十年生辰」[13]及び『中華民国三十六年中国美術年鑑』も、京都留学については何も記していない。

ところで、一九一七年当時、京都で染織の課程を設けていた学校は京都高等工芸学校（現、京都工芸繊維大学工芸学部）だけである。同校は一九〇二年一〇月色染科、機織科、図案科の三科で開校し、修学年限三年であった。しかし、京都工芸繊維大学工芸学部に保管される同校の学籍関係書類に張大千、張沢の名は見当らない。

京都には、当時他に京都市立絵画専門学校と京都市立美術工芸学校とがあった。両校とも小学校卒業で入学する五年制課程、中学校卒業で入る二年制予科、予科修了者の進む三年制本科、本科修了者の進む二年制研究科を設けていた。一九一七年に張大千は一九歳、兄張沢（善孖）は一七歳年長の三六歳であったから、二人が入学するとすれば予科であったと考えられる。しかし、京都市立芸術大学美術学部保管の京都市立絵画専門学校の学籍関係書類及び、京都市立銅鉈美術工芸高校に移管されている京都市立美術工芸学校の学籍書類には、張大千、張沢の入学あるいは在籍を示す資料はなく、張大千の京都留学には大きな疑問がのこる。二人の留学が、研究生あるいは聴講生（当時そのような制度があったとしてであるが）のような、学籍関係書類に痕跡を留め難い身分であった可能性も考えられる。しかし、留学説が張大千と親しかった林建同によって、晩年になって突然現れたことは、溥心畬のベルリン大学留学説がやはりその晩年、台北に移ってから始まったのとよく似ていて、筆者は粉飾の疑いを捨てきれない。

張大千は、一九一七年を別にして、一九二九年、一九三〇年、一九三一年、一九三五年に来日しているし、戦後は一九五一年を最初に、一九六五年までほぼ毎年のように日本を訪れている。そのような日本訪問の折、張大千が日本画や日本に伝存する中国の古画から多くのものを学びとっていたことは、張大千の仕女図に日本画に近いものがあること、彼の金地の用法が日本画の金箔押地に由来すること、張大千作とされる中国古画に日本所在の中国画、あるいは中国の故事に題材を取った日本画家の作品が反映していることなどから知られる。それについてはすでに指摘されているので[15]、ここでは取り上げない。

三、傅抱石

日本留学がその画風の形成に決定的な影響を及ぼしたのは、傅抱石の場合

挿図5　傅抱石　仿黄鶴山樵秋壑鳴泉図　『傅抱石展』から

挿図6　傅抱石　長石上鳥図　『傅抱石展』から

挿図7　傅抱石　山水図　1941年か　『傅抱石画集』から

挿図8　傅抱石　屈子吟行図　1953年　『博抱石画集』から

挿図9　横山大観　屈原　1898年　『大観作品集』から

であろう。

傅抱石（一九〇四―一九六五）は、徐悲鴻の勧めを受けて、江西省派遣留学生として一九三三年十月来日、翌一九三四年（昭和九年）三月帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）研究科に入学し、金原省吾に東洋画論を、山口蓬春、川崎小虎、小林巣居人に日本画を、清水多嘉示に彫刻を学んだ。金原省吾をはじめ、多くの日本の文人、画家の信頼を得て、一九三五年五月には、東京銀座松坂屋で書画篆刻の個展を開き、好評を博したが、六月、母の病篤しの知らせに接して帰国した。その間の動静は金原省吾の日記[16]が詳しく伝えている。

ところで、傅抱石の閲歴と画業については、すでに張国英著『傅抱石研究』に詳しいから、ここでは日本画との関係について、同書に拠って簡単に触れるに止めたい。

留学前の傅抱石が、主として黄公望や八大山人、石涛、呉昌碩などの画風を学んでいたことは『傅抱石画集』[18]収載の作品や武蔵野美術大学に遺されている作品（挿図五、六）から容易に知られる。現在、画集等に発表されている作品の中、帰国後の最も早い作品は一九四一年作と推定される「山水図」（挿図七）であるが、そこには留学前の作品に見られるような、あるいは銀座松坂屋での個展を訪れた正木直彦がその日記に「海派の疎獷なる画」と書き留めたような粗々しさ、もしくは逸格風な筆致は全く残っていない。かわりに、その後の傅抱石の筆法の特徴である半円、あるいは弧を描くような軽く細い線と潤いのある墨法が主になっているし、点景の人物の姿は橋本関雪の描く人物に近い。なお、一九九一年五月、上海美術館で開催された「傅抱石画展」には、一九四一年作「仿橋本関雪訪隠図」が出品されていて、傅抱石が留学時から橋本関雪に傾倒していたことを伺わせる。

挿図10　傅抱石　雪山　1963年　『博抱石画集』から

傅抱石の日本での学画の具体的な状況は分からないが、帰国後の作品には画法と図柄の上で、橋本関雪のほか横山大観（挿図八、九、一〇、一一）、川合玉堂（挿図一二、一三）、平福百穂、小杉放庵から学びとった跡を示すものが多い。とりわけ、人物の表情、姿態は関雪、大観の人物に近い。

傅抱石の特色は、我国の朦朧体のように、潤いのある水墨のぼかしを基調にして、中国画の伝統的な線描をほとんど用いない画法と、屈原、「楚辞」、あるいは李白、杜甫など歴史、故事に題材を取った、いわば歴史画が中国の同時代の画家に比べて目立って多いことである。その二つはいずれも日本で学んだものであろう。

解放後の中国で、ある時期傅抱石の画風が、中国画ではない、水墨画では

ない、として批判を受けたのは、その朦朧体のような画法のためであった。しかし、彼の画風は多くの青年画家を引き付け、南京を中心に傅派と呼ばれる一派を生んだ。

四、王式廓

留日美術学生のうち、多くの者が卒業して帰国すると美術教育に携わった。例えば、学業半ばで帰国を余儀なくされた傅抱石もそうであるし、東京美術学校留学生に限ってもその数は、李岸、江新、許敦谷、陳抱一など一三名を数える。同校最初の中国人卒業生の一人李岸（字叔同、明治三九年一〇月四日付『國民新聞』第五面に、「清国人洋画に志す」の見出しで、肖像写真、スケッチを入れて約七八〇字の紹介記事がある。）は一九一〇年に卒業すると、すぐに天津工業専門学校教員となり、ついで上海城東女学を経て一九一三年春、浙江省立第一師範学校に移り、一九一八年に剃髪するまで、同校で図画、音楽を教えた。このときの同僚に姜丹書、夏丏尊、馬叔倫が、また学生に豊子愷、呉夢非、金咨甫、劉質平、李鴻梁など、後に美術家あるいは美術教育家として名を成した人たちがいた。

そのほかにも、確かめることはできないが、太平洋美術学校絵画部卒業という関良（上海美術専門学校教授、国立芸術専科学校教授）、川端画学校洋画部卒業と伝える倪貽徳（上海美術専門学校教授）、陳盛鐸（上海美術専門学校教授）をはじめ、拾い上げれば一〇名を越えるであろう。

しかし、彼らの美術教員としての活動の具体的なことは、ほとんど伝わらない。僅かに李叔同が浙江省立第一師範学校で、日本から持ち帰った石膏像を写生の教材に用いたこと、一九一四年に中国で初めて男子裸体モデルを写生させたと伝えられること[19]、また陳抱一がやはり日本から石膏像をたくさんもって帰り、東京美術学校での教育と同じように、デッサンを重んじたことが知られるだけである。

帰国留日美術学生の活躍が盛んになり始めた一九一〇年代末から三〇年代前期にかけて、上海を中心に美術学校の設立が相次いだが、一九一二年（中華民国元年）に上海図画美術院として発足し、解放後の一九五二年、華東芸術専科学校に改組されるまで存続した上海美術専科学校を唯一の例外として、多くは二、三年、あるいは数年で廃校になる例が多かったから、美術担当教員となっても、日本で学んだ教育法を実践して十分な成果を挙げるまでに至らなかった者が多いと考えられる。さらに一九三七年七月、日中戦争が勃発すると、ほとんどの学校が疎開につぐ疎開を余儀なく

挿図11　横山大観　瀟湘八景の三、江天暮雪　1912年
『大観画業六十年展図録』から

挿図12　傅抱石　四季山水・冬　1954年　『傅抱石画集』から

挿図13　川合玉堂　二日月　1907年　『玉堂画集』から

挿図14　王式廓　墨松図　1931年

▶挿図15　王式廓　枯木栖鳥図　一九三二年

月北平が解放されると華北大学と一緒に北京に入った。五〇年四月、華北大学三部美術系と北平芸術専科学校が合併して中央美術学院が発足すると、教授として素描と油画を教えた。

中央美術学院初代院長になった徐悲鴻は、一九一九年から一九二七年まで一〇年近くに及んだヨーロッパ留学で、絵画の基本がデッサンにあることを学び、帰国後はデッサンに重点を置いた、ヨーロッパ風の教育法を実践した人であったこと、また解放後の美術が社会主義リアリズムへと向っていたことも、すぐれたデッサン力を身につけていた王式廓の活躍を助けたと考えられる。

現在遺されている王式廓の最も早期の作品は、済南の高級中学在学中（一九三一年）の「墨松図」（挿図一四）と北平美術学院（一九三二年）での「枯木栖鳥図」（挿図一五）である。その二点は、敢えていえば当時画名の高かった呉昌碩に倣ったもので、王式廓が学んでいた西洋画の影響を示す跡は全くない。素描では、『王式廓画集』[20]所収の一九四〇年の延安での速写（挿図一六）が最も早い作品であるが、先の二点との間には大きな隔りがある。同画集に拠ると、王式廓の素描は一九四〇年以後、急速に熟達し、精確さを高めている。その頂点が一九五九年の素描「血衣」（一九二×三四五センチ・挿図一七、一八）である。同画集所載の一五三点のうち、素描が一〇七点ということからも知られるように、王式廓の本領は素描にあって、そのため画材の乏しい延安で彼は存分に腕を揮うことができたといえよう。

（九七・二・九）

註

（1）『散原精舎文集』巻十三所収

されて、石膏像のような嵩高くて破損し易い教材は原地に遺されることが多かったし、一方で木刻に代表される社会主義美術が徐々に美術学校にも浸透していたから、帰国留日美術学生が日本で習得した古典的な教育法を実際に用いる余裕は無くなったと考えられる。

そのような中で、日中戦争が始まると、学業を捨てて帰国、延安に行って魯迅芸術学院美術系教員となり、解放後は中央美術学院の設立に関わり、一九七三年制作中に倒れるまで教授の職にあった王式廓は、日本で学んだデッサンや油画法をもとに、新中国の美術教育の確立と油画の発展に寄与することのできた数少ないひとりである。

王式廓（一九一一―一九七三）は済南愛美高級中学芸術師範科から北平美術学院（一九三一年）、国立杭州芸術専科学校（一九三三年）を経て、一九三五年上海美術専科学校を卒業すると、同年秋来日して川端画学校洋画部に入り素描を学んだ。翌一九三六年四月東京美術学校油画科予科に入学、一年間素描を学び、翌年本科に進むと藤島武二教室に入って油画を学んだ。しかし、七月に日中戦争が始まるとすぐに帰国し、はじめ山東聊城、ついで武漢、武昌で抗日宣伝画の制作に従事したのち、一九三八年九月延安に入り、一二月魯迅芸術学院美術系教員に迎えられた。その後、戦局の推移に伴って、晋冀魯豫辺区の北方大学、河北省正定の華北大学に転じ、一九四九年一

(2) 『湖社月刊』第二〇冊所載
(3) 筆者編『民国期美術学校畢業同学録・美術団体会員録集成』(和泉市久保惣記念美術館紀要2・3・4合刊、一九九一年刊)所収
(4) 『逸経』第六期　上海人間書屋　民国二五年五月
(5) 『傳記文学』第二一巻六期、第二二巻二期、三期　台北傳記文学雑誌社　一九七二年刊
(6) 『中国美術研究：陳少豊教授従教五十年紀念論文集』所収　人民美術出版社　一九九四年一二月
(7) 「近代中画人伝六　嶺南三家—高剣父・高奇峰・陳樹人—新国画運動の先駆者たち」(『季刊水墨画』24　一九八三年四月刊)
(8) 『高剣父写生稿本集粋』　広州美術館　一九九四年刊
(9) 「張大千的京都留学生涯」(『張大千学術論文集』九十紀念学術研討会所収、台北国立歴史博物館　一九八八年刊)
(10) 香港梅花書屋　一九七一年四月刊
(11) 台北国立歴史博物館　一九八八年五月刊
(12) 『逸経』第二二期所収　一九三七年一月刊
(13) 『子日叢刊』第二号所収　一九三八年六月刊
(14) 上海市文化運動委員会編　一九四八年一〇月刊
(15) 傅申「略論日本対国画家的影響」(『中国・現代・美術—兼論日韓現代美術国際学術研討会論文集』台北市立美術館　一九九一年刊)
(16) 金原卓郎編「本学留学時代の傅抱石—金原省吾・妻よしをの日記から—」(『傅抱石展—中国美術学院学生優秀作品展記念』武蔵野美術大学美術資料図書館　一九九四年九月刊)
(17) 美術論叢三二　台北市美術館　一九九一年七月刊
(18) 南京金陵書画社　一九八一年六月刊
(19) 呉夢非「五四運動前後的美術教育回憶断片」(『美術研究』一九五九年三期)。但し、このことは他に資料がなく、疑問がある。
(20) 北京人民美術出版社　一九八二年五月刊

挿図16　王式廓　新聞を読む延安農民　1940年
『王式廓画集』から

資料　留日美術学生名単

この名単は同窓会名簿等、公刊されている資料から作成したものである。但し台湾籍及び満洲国籍留学生は省いた。

なお、東京美術学校留学生については東京芸術大学教育資料編纂室吉田千鶴子氏作成の資料を利用させて頂いた。御礼申し上げる。

東京美術学校留学生

姓名	本籍	学科	入学年	卒業年	備考
黄輔周	直隷	西洋画選科	明治三八年九月	中退（時期不明）	
李岸（叔同）	天津	西洋画選科	明治三九年一〇月	明治四四年三月	「自画肖像」浙江省立第一師範学校
曾延年	四川	西洋画選科	明治三九年一〇月	明治四四年三月	
		研究科	明治四四年四月	明治四五年三月除名	
談誼孫		彫刻選科	明治三九年	明治四〇年、彫刻科第二年	
白常齢	北京	西洋画選科	明治四一年九月	大正二年三月	「自画肖像」
陳之駟	直隷	西洋画選科	明治四一年九月	大正二年三月	「自画肖像」
汪濟川		西洋画選科	明治四二年	明治四四年一一月休学	

◀挿図17　王式廓　血衣　習作　一九五五年
『王式廓画集』から

挿図18　王式廓　血衣　部分　1959年
『王式廓画集』から

潘壽恒	安徽	西洋画選科	明治四三年九月	大正元年一〇月除籍	「自画肖像」「弾琴」	
方明遠		西洋画選科	明治四三年九月	大正四年三月	「自画肖像」「熟読深思」	
雷毓湘	広東	西洋画選科	明治四五年三月復校	明治四五年二月除籍		
			明治四四年九月	大正六年三月		
		研究生	大正三年四月	大正二年退学		
嚴智開	天津	西洋画選科	大正元年九月	大正六年三月	「自画肖像」「編物」	
		研究生	大正七年二月	大正六年三月		
江新	江蘇	西洋画選科	大正元年九月	大正六年三月	「自画肖像」「西湖」、天津市立美術館長	
（小鵬）					後退学し米国留学	
汪洋洋	山東	西洋画選科	大正元年九月	大正六年三月	「自画肖像」「夜読」、上海美術専科学校	
李廷英	雲南	西洋画選科	大正二年九月	大正七年三月	「自画肖像」「読書」	
劉鏡源	広東	西洋画選科	大正二年九月	大正七年三月	「自画肖像」	
凌驥		西洋画選科	大正二年九月	大正三年一月退学帰国	「自画肖像」	
伍靈	広東	日本画選科	大正二年九月	大正八年三月	「唐美人」、北京美術学校	
陳英	奉天	日本画選科	大正二年九月	大正三年五月除籍		
孟憲章	奉天	日本画選科	大正二年九月	大正三年五月除籍		
楊鑄成	四川	彫刻科牙彫部選科	大正二年九月	大正三年九月退学		
崔國瑤	広東	西洋画選科	大正三年九月	大正八年三月	「自画肖像」「或人の像」	
		研究生	大正八年四月	大正九年四月満期除籍		
許敦谷	福建	西洋画選科	大正三年九月	大正九年三月	「自画肖像」「少女」、国立藝術専科学校、武昌藝術専科学校	
潘元牧	広州	西洋画選科	大正三年九月	大正五年五月除籍		
史秉彝	雲南	金工選科	大正三年九月	大正三年一二月―四年九月休学		
				大正四年一一月除籍		
李長元	雲南	西洋画選科	大正四年九月	大正七年五月除籍		
			大正八年一月復校	大正九年三月	「自画肖像」「懐春」	
胡毓桂	広東	西洋画選科	大正四年九月	大正九年三月	「自画肖像」	
黄源煦	雲南	西洋画選科	大正四年九月	大正五年二月除籍		
陳丘山	広州	西洋画選科	大正四年九月	大正五年一一月除籍		
陳洪鈞	広東	西洋画選科	大正五年九月	大正一〇年三月	「自画肖像」「室隅にて」、中華藝術大学	
（抱一）						

汪亞塵	杭州	西洋画選科	大正六年九月	大正八年九月停学	新華藝術専科学校、上海美術専科学校	三八
周勤豪	広東	西洋画選科	大正六年九月	大正九年四月復校		
				大正一一年五月	「自画像」「池」、上海美術学校、上海藝術大学	
				大正一一年三月		
費德堃	蘇州	西洋画選科	大正六年九月	大正七年一〇月除籍		
伍子奇		西洋画選科	大正七年九月	大正一二年六月		
周天初	浙江	西洋画選科	大正七年九月	大正九年一〇月病欠届		
				大正一二年三月	「自画像」「西湖」	
高春萊	天津	西洋画選科	大正七年九月	大正七年一〇月除名		
夏伯鳴	浙江	西洋画選科	大正七年九月	大正一二年二月除籍		
馬寶恒	直隷	図画師範科別科	大正七年一〇月			
		図画師範科	大正八年四月第二年級へ仮編入	大正一〇年三月特別修了		
李景綱	直隷	図画師範科別科	大正七年一〇月			
		図画師範科	大正八年四月第二年級へ仮編入	大正一〇年三月特別修了		
張載泗	福建	西洋画選科	大正八年九月	大正一一年六月除籍		
陳元澣	広東	西洋画選科	大正八年九月	大正一三年六月		
雷公賀	広東	西洋画選科	大正八年九月	大正一三年六月		
譚華牧	広東	西洋画選科	大正八年九月	大正一三年六月（特別学生）	広州藝術専科学校	
何善之	広東	西洋画選科	大正八年九月	大正一三年六月（特別学生）		
王道源	湖南	西洋画選科	大正九年九月	大正一五年三月（特別学生）	上海藝術専科学校	
		研究科	大正一五年四月	昭和四年九月まで在籍	「自画像」	
蔡侃	湖北	西洋画選科	大正九年九月	昭和二年七月（特別学生）	「自画像」	
張境	湖北	西洋画選科	大正九年九月	大正一〇年二月除籍		
余蘭初	広東	西洋画選科	大正九年九月	大正一〇年九月除籍		
陳杰	浙江	図案選科	大正九年仮編入同九月第一年級編入	大正一五年（特別学生）		
（之佛）						

丁衍鏞	広東	西洋画選科	大正一〇年九月	大正一五年三月（特別学生）	「自画像」「化粧」、広東藝術専科学校、中華藝術大学
衛天霖	山西	西洋画選科	大正一〇年九月	大正一五年三月（特別学生）	「自画像」「閨中」、北京大学、北京藝術専科大学
譚連登	広東	研究生	大正一一年九月	昭和二年十月退学	
林丙東	福建	西洋画選科	大正一一年九月	昭和二年三月	「自画像」「俯視」
		研究生	昭和二年九月	昭和二年七月（特別学生）	「自画像」、昭和六年四月—昭和七年三月（外務省文化事業部選抜学生）
李湘波	直隷	図案科第一部選科	大正一一年九月	大正一三年二月除籍	
鄭皚生	安徽	西洋画選科	大正一二年一一月	大正一四年八月没	
許達（幸之）	揚州	西洋画科	大正一四年四月（特別学生）	昭和二年帰国、逮捕後投獄三ヶ月間	「自画像」「友人の家」、中華藝術大学、中央美術学院
				昭和五年三月（特別学生）	
熊汝梅	広東	西洋画科	大正一四年四月	昭和五年三月	
		研究生	昭和五年五月	昭和七年三月除籍	「自画像」「裸婦」
陳學誠			大正一四年四月、入学取消		京都高等工藝学校に入学
葉仲豪	広東	西洋画科	大正一五年四月（特別学生）	昭和四年強制送還	
王文溥（曼碩）	山東	西洋画科	昭和三年四月（特別学生）	昭和五年三月退学	
		研究科	昭和八年四月	昭和八年三月	「自画像」
龔謨	江蘇	西洋画科	昭和三年四月	昭和一〇年三月まで在学	
		研究科	昭和八年三月	昭和九年まで在学	
陳迹	広西	学科聴講生	昭和三年五月	昭和四年三月	
陳洵	江蘇	西洋画科	昭和四年四月	昭和九月三月	「自画像」「読書」
		研究生	昭和九年四月	昭和一〇年二月退学	
司徒慧敏	広東	図案科	昭和四年四月	昭和五年五月除名	
林乃幹	広東	西洋画科	昭和五年四月	昭和一〇年三月	「自画像」、「弟」、国立北京藝術専科学校、北京藝術職業学校、京華美術学院
		研究生		昭和一二年三月修了	
林榮俊	広東	西洋画科	昭和五年四月	昭和七年三月落第	昭和一〇年四月臨時版画教室木版画部兼修
			昭和八年再入学	昭和一二年三月	
鍾惠若	広西	西洋画科	昭和五年四月	昭和六年四月—七年三月休学	
			昭和八年復学	昭和八年一一月除名	
譚顯勲	広東	西洋画科	昭和五年四月	昭和七年六月除籍	
金學成	江蘇	彫刻科塑造部	昭和五年四月	昭和一〇年三月	「立像」
李顕塵	遼寧	図案科	昭和六年四月	昭和七年三月除籍	
盧景光	広東	図案科	昭和六年四月	昭和六年一一月除名	
蔣玄佁	浙江	彫刻科塑造部	昭和六年四月	昭和七年六月除籍	
胡光弼	広東	彫刻科塑造部	昭和九年四月予科	昭和一二年一二月帰国	
於中和	江蘇	彫刻科塑造部	昭和九年四月予科	昭和一一年一二月除籍	
兪成輝	江蘇	油画科	昭和九年四月予科	昭和一二年九月休学帰国	
薛瀛（瀛生）	無錫	油画科	昭和九年四月予科	昭和一一年三月除名	
林達川	広東	彫刻科塑造部	昭和一〇年四月予科	昭和一一年七月帰国	
			特別学生	昭和一八年九月	
			昭和一五年一月復校	昭和一一年七月帰国	
徐文熙	江蘇	工藝科彫金部	昭和一〇年四月予科	昭和一二年九月病気休学	
沈壽澄	浙江	工藝科鋳金部	昭和一〇年四月予科	昭和一三年九月帰国	
趙琦	江蘇	油画科	昭和一〇年四月予科	昭和一二年休学帰国	魯迅藝術学院、中央美術学院
王式廓	山東	油画科	昭和一一年四月予科		
趙冠洲		彫刻科塑造部	昭和一一年予科か	昭和一二年三月塑造部一年停学	
許統璋	広東	建築科	昭和一一年四月予科	昭和一二年九月休学帰国	
沈柏年	上海	工藝科図案部	昭和一二年四月予科	昭和一二年九月休学帰国	
朱坤	浙江	油画科	昭和一六年四月予科	昭和一七年四月—一八年九月病気休学	
				昭和一九年四月休学帰国	

閻振宇	河北	彫刻科塑造部	昭和一六年四月予科	昭和一九年四月―二〇年三月帰国休学
				昭和二一年塑造部三年在学
呉讓賓		油画科	昭和一八年四月	昭和一八年九月より病気休学
崔燿義	広東	日本画科	昭和一八年四月	
劉榮夫		油画科	昭和一八年一〇月聴講生	国立北京藝術専科学校教授
李曼曾	北京	油画科選科	昭和一九年四月	昭和二一年四月休学
郭明橋	山東	工藝科図案部生	昭和一九年八月聴講	昭和二一年まで在学
勵俊年	浙江	油画科	昭和二〇年四月予科	昭和二〇年六月休学

女子美術学校留学生

『女子美術大学八〇年史』から

姓名	本籍	専攻	在学期間	備考
何香凝	広東南海	日本画科・選科高等科	明治四三年四月日本画科二年級編入、明治四四年三月卒業	

京都市立絵画専門学校留学生

『京都市立藝術大学百年史』から

姓名	本籍	専攻	在学期間	備考
鄭錦	広東中山	絵画科本科	明治四四年三月―大正三年三月二五日卒業	国立北京美術学校
陳樹仁	広東番禺	絵画科	明治四五年三月卒業	上海美術専門学校

（人）

帝国美術学校留学生

『傅抱石展』から

姓名	本籍	専攻	在学期間	備考
傅抱石	江西南昌	研究科	昭和九年三月―昭和一〇年六月帰国	中央大学藝術系

京都高等工藝学校留学生

『京都高等工藝学校一覧』昭和四年版から

姓名	科目	卒業年月	勤務先
李邦燦	色染科	明治四三年七月	天津河東水梯子関帝廟内生々工場
趙鴻翔	色染科	大正三年七月	蘇州第二工業学校
劉爾昌	色染科	大正三年七月	天津工業試験所（天津新站直隷工業試験場）
張樹棻	色染科	大正四年七月	河南省開封甲種工業学校
廖有徳	色染科	大正四年七月	自営　亜細亜洋行
譚克麟	色染科	大正九年三月	長沙第一甲種工業学校
王榮壽	色染科	大正一一年三月	
崔孟尹	色染科	大正一一年三月	
張德純	色染科	大正一二年三月	
賈英雲	色染科	大正一三年三月	
李翰芳	色染科	大正一四年三月	
賈開泰	色染科	大正一四年三月	
焦增銘	図案科	大正二年七月	
耿步霄	図案科	大正四年七月	
趙長源	図案科	大正一一年三月	
房家鎬	図案科	大正一二年三月	
趙涵璋	図案科	大正一四年三月	山西省皇廟西巷二号
張景桓	図案科	昭和二年三月	北京地安門外鑄鐘廠六〇号
沈學誠	図案科	昭和三年三月	

東京高等工藝学校留学生

『東京高等工藝学校一覧』昭和一四年版から

姓名	本籍	学科目	在籍年月	勤務先
儲致忠	江蘇	工藝図案科	昭和二年九月入学、昭和四年一〇月研究修了	北京師範大学
王綱	浙江	工藝図案科	昭和二年四月入学、昭和五年一二月研究修了	北京藝術専科学校
高希舜	湖南	工藝図案科	昭和二年四月入学、昭和六年三月研究修了	南京美術学校
王之英	浙江	工藝図案科	昭和五年五月入学、昭和九年三月研究修了	河南省立工藝専門学校
王道平	湖北	工藝図案科	昭和八年四月入学、昭和一一年三月研究修了	武昌美術専門学校
張鈞	江蘇	工藝図案科	昭和九年四月入学、昭和一一年三月研究修了	南京正中書局美術部
李世澄	江蘇	工藝図案科	昭和九年四月入学、昭和一二年三月研究修了	
商家堃	江蘇	工藝図案科	昭和一〇年四月入学、昭和一二年三月研究修了	
王元奇	安徽	工藝図案科	昭和一一年四月入学、昭和一二年三月研究修了	
孟繁智	河南	工藝図案科	昭和一一年四月入学、昭和一二年七月研究修了	
呉啓瑤	福建	工藝図案科	昭和一一年四月、昭和一二年七月研究修了	
陳洽	江蘇	金属工藝科	大正一五年三月卒業	
關漢勳	湖北	印刷工藝科	大正一五年九月入学、昭和五年三月選科修了	上海中央機器廠
馬克清	奉天	印刷工藝科	昭和九年四月入学、昭和一〇年三月選科修了	湖北省立実験中学教員
方兆	広東	印刷工藝科	昭和九年四月入学、昭和一〇年三月選科修了	満洲国奉天省立第二工科学校

日本大学藝術学部留学生

同学部『同窓会名簿』から

姓名	専攻	卒業年
金斗星	法文学部文学科（藝術学）	大正一二年
都鎮鎬	法文学部文学科藝術学選科	大正一三年
金俊星	法文学部文学科藝術学選科	昭和二年

葉都　法文学部文学科（藝術学）　昭和六年
陳傳纘　法文学部文学科（藝術学）　昭和九年
曾燮　法文学部文学科藝術学選科　昭和一一年
崔玉禧　法文学部文学科藝術学選科　昭和一二年
金東林　法文学部文学科（藝術学）　昭和一五年
徐德實　法文学部文学科藝術学選科　昭和一五年
穆家麟　高等専攻科藝術科　昭和一五年
潼志謙　高等専攻科藝術科　昭和一五年
金仁杰　法文学部藝術学科　昭和一六年
李毀　法文学部藝術学科　昭和一六年
李哲載　法文学部藝術学科　昭和一七年
龐曾疵　高等専攻科藝術科　昭和一八年
（朝鮮籍留学生が混じっていると考えらえる）

『学部官報』掲載、赴日美術学生

福建省留学日本官費生調査表　『学部官報』六　光緒三二年一〇月一日

林元麟　福建閩県人　附生　一八歳　先入師範速成科、後入図画学校　光緒三一年正月出、三二年四月回国
孫葆琪　福建侯官県人　童生　二六歳　手工　光緒三〇年一〇月出
王靖先　福建侯官県人　童生　二〇歳　手工　光緒三〇年一〇月出
林淮琛　福建侯官県人　童生　二〇歳　染織　光緒三〇年一〇月出

広西提学使呈送遊学東西洋官費私費各生一覧表　『学部官報』四〇　光緒三三年一〇月二一日

石寶恭　臨桂県人　日本　染織学校　染織
邱世英　貴県人　文童　三四歳　日本　美術学校手工専修　光緒三三年三月出　年半

閩督咨送閩省赴東留学各項高等専門学生清摺文　『学部官報』四二　光緒三三年一一月一一日

（略）
林琭、林元麟等二名入補修科於光緒三二年正月詳明給咨派遣赴東、肄習音楽図画等科
黄頤貞、葉在畬等二名入早稲田預科於光緒三二年七月詳明派遣赴東、肄習手工等科
（略）
鍾鵑祥一名習図画専科
以上学生九名原係自費赴東肄習、於光緒三二年一一月由司詳明給予官費
（略）
蔡世俊一名入東京高等工業、肄習染織科
（略）
以上学生十三名、由自費考入高等専門経楊星使咨閩按部章給予官費等因究竟幾年畢業応請查明覆閩核辨理合登明